

平成 30 年 4 月 1 日

平成 29 年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する () に ○を付ける	・共同研究 (○) ・個人研究 ()	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部・准教授 渡邊敦子	
研究課題名	看護系大学生の学業への意識と精神的健康の実態および進路選択との関係	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
日下和代 向井京子	看護学部 教授 看護学部 助教	データ収集と分析、文献検索 同上
研究期間	平成 29 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日	

研究実績の概要（1）

1. 目的

看護学生の教育課程、特に臨地実習においては知識や技術が未熟な状態で慣れない環境への適応を迫られることによって学生が体験するストレスは大きい。看護学生への質問紙調査により、ストレス対応能力の他、学習の目標志向性、学習活動に関連する対人関係パターン等の実態を、心理測定によって把握し、学習活動に影響すると考えられる看護職への関心との関連性について明確にする。

2. 方法

- 1) 研究対象：本学看護学部、その他首都圏の大学の看護系学部^{に在籍する}学生約 700 名
- 2) 調査方法：本学または本研究の同意が得られた大学で、調査票配布の同意が得られた教員が担当する授業の前、あるいは後の時間帯に調査票を配布。回答後の調査票は郵送により回収した。
- 3) 調査内容：
 - 1) 基本属性（学年、年齢、課外活動の有無等）
 - 2) 邦訳版 SOC-29 尺度（首尾一貫感覚）：29 項目
 - 3) 内的作業モデル尺度：18 項目
 - 4) 促進予防焦点尺度（制御焦点）：16 項目
 - 5) 看護職についての関心：8 項目

4) 分析方法

看護職についての関心と、ストレス対応能力、学習活動に関連する対人関係パターン、学習の目標志向性を相関分析によって検討する。

3. 倫理的配慮

研究対象者には①研究の趣旨・目的、②研究方法、③自由意思の保証、④同意撤回の保証、⑤情報保護に関する対策（データの保管方法等）、⑥研究結果の公表などを口頭および書面にて説明、調査票の提出をもって同意を得たこととした。研究対象となった大学には、調査票配布の同意が得られた教員に対し、書面にて①～⑥を説明し同意を得た。併せて本学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 KWU-IRBA#17116）。

4. 結果および考察

質問紙は 3 大学において 793 部配布、315 名より回答が得られた（回収率 39.7%）。欠損値のない 297 名について分析を行った。

1) 基本属性

本調査の分析の対象者の基本属性を、表 1 に示す。

2) ストレス対処能力（首尾一貫感覚；SOC）と看護職への関心との関連

本調査での SOC 総得点の平均は 118.84 点であった。その平均点の標準偏差の 2 分の 1 以上（130 点以上）を高群、2 分の 1

		N		%			
性別	男性	2	0.7	年齢	18歳	47	15.8
	女性	295	99.3		19歳	69	23.2
学年	1年	80	26.9	20歳	63	21.2	
	2年	81	27.3	21歳	66	22.2	
	3年	56	18.9	22歳	47	15.8	
	4年	80	26.9	23～27歳	5	1.6	

研究実績の概要（2）

以下（108点以下）を低群、その間（109～129点）を中群としてレベル分けを行った。レベルごとの看護職への関心8項目との相関を表2に示す。

表2 看護職への関心とSOCのレベルとの相関

	高	中	低
	130～	109～129	～108
看護職への関心	N=88	N=115	N=94
1) 看護系大学への進学を主体的に選択した	.273**	.085	.179**
2) 看護職は自分に合っていると思う	.433**	.068	-.497**
3) 偏差値や立地等職業以外の条件で本学を選択した	.133*	-.067	-.061
4) 資格や収入という点で看護職を選択した	-.024	.005	.019
5) 看護の専門科目に関心がもてない	-.295**	-.018	.309**
6) 看護の専門科目の授業内容が理解できない	-.257**	.042	.208**
7) 本心では看護職に就きたくないと思う	-.338**	-.018	.351**
8) 看護職以外の職業につきたいと考えている	-.278**	.008	.264**

Pearson's product moment correlation coefficient **. $p < 0.01$, *. $p < 0.05$

SOC高群は、看護の職業選択や進学、専門的な学習への動機づけが高く、SOC低群はその反対の傾向がみられた。ストレス対応能力が、進路選択や学業への態度に反映している。看護職への動機づけが乏しい学生には、心理的な支援の必要性があると考えられる。

3) 対人関係パターン、学業への姿勢の要因と看護職への関心との関連

表3 看護職についての関心と内的作業、制御焦点との相関

看護職への関心	内的作業			制御焦点	
	安定型	両価型	回避型	利得接近	損失回避
1) 看護系大学への進学を主体的に選択した	-.179**	.147*	.219**	.228**	-.040
2) 看護職は自分に合っていると思う	-.349**	.382**	.201**	.290**	-.268**
3) 偏差値や立地等職業以外の条件で本学を選択した	-.146*	.091	.074	.090	-.028
4) 資格や収入という点で看護職を選択した	.044	.070	-.058	-.055	.054
5) 看護の専門科目に関心がもてない	.197**	-.198**	-.193**	-.260**	.089
6) 看護の専門科目の授業内容が理解できない	.144*	-.218**	.017	-.131*	.193**
7) 本心では看護職に就きたくないと思う	.283**	-.220**	-.262**	-.272**	.124*
8) 看護職以外の職業につきたいと考えている	.201**	-.165**	-.238**	-.232**	.040

Pearson's product moment correlation coefficient **. $p < 0.01$, *. $p < 0.05$

学習に関する対人関係パターン（内的作業）においては、安定型よりもそれ以外のパターンのほうが職業選択や進学に対し主体性が見られた。学習の目標志向性（制御焦点）においては、利得接近（成功のためならリスクを受け入れる）のほうが、損失回避（能力が劣ることを隠そうとする）よりも、職業選択や進学に対し主体性が見られた。対人関係パターンの安定という要因は、職業選択や学習には肯定的な影響をもたらしていないことがわかった。目標志向性は利得接近であるという要因がより主体的であり、学生が自己評価を低めることなく積極的に学習を進めていけるような支援の必要性が示された。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

- ・ 2019年(第25号) 総合文化研究所紀要に研究成果を発表予定
- ・ 第35回日本精神衛生学会において研究成果を発表予定